B6胆管内進展後に腫瘤形成を示した直腸癌肝転移の一例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本胆道学会 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲葉, 圭介, 鈴木, 昌八, 坂口, 孝宣, 大石, 康介, 鈴木, 淳司, 福本, 和彦, 太田, 茂安 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/1908

O-112　B6胆管内進展後に腫瘤形成を示した直腸癌肝転移の一例

浜松医科大学　第二外科
稲葉　圭介，鈴木　昌八，坂口　孝宣，大石　康介，鈴木　淳司，福本　和彦，太田　茂安

転移性肝癌が肝内胆管浸潤を伴う頻度は約6%とされ，比較的稀な発育形態である．今回，肝内胆管内の進展後に腫瘤形成を示したと考えられる直腸癌肝転移症例を経験したので，文献的考察を加え報告する．【症例】69歳，男性．04年2月，他院で直腸癌（Rs）に対し，根治切除を受けている．病理組織学的には，高分化型腺癌，ss，n（－），ly2，v1，ow（－），aw（－）であった．術後補助化学療法を受け，経過観察中であった．06年5月の腹部CT検査で肝後区域胆管枝の拡張が認められ，精査されたが原因不明．同年12月のCTで肝B6に沿った索状腫瘤影とS7に径4cmの腫瘍を指摘され，当院に紹介．入院時，CEA 7.3ng/ml，CA19-9 33 U/ml. MRIではB6に沿った病変は肝門部方向からS6肝表に進展し，2cm大の腫瘍を形成していた．ERCPでは肝後区域胆管枝は造影されず，胆汁細胞診は陰性であった．他部位に転移・再発はなく，胆管内進展を伴う直腸癌多発肝転移と診断し，07年2月に手術を施行した．肝門部ならびに肝十二指腸間膜方向への進展を考慮し，肝十二指腸間膜内リンパ節郭清を伴う肝右葉切除術に肝外胆管切除兼胆道再建術を併施した．術中迅速組織診で，左肝管断端は陰性であった．病理組織学的に，S7とS6の腫瘍は各々独立した高～中分化型腺癌であり，原発巣との類似性が確認され，大腸癌多発肝転移と診断された．後区域胆管枝には中枢側に腫瘍栓がみられ，周囲にグリソン鞘浸潤や神経内浸潤を伴いながら進展しいた．右肝管内および周囲に腫瘍細胞は認めなかった．S6には，術前診断されていなかった微小な転移巣も認めた．術後3月の現在，外来で経過観察中である【結語】胆管内進展を伴う大腸癌肝転移は稀な発育形態であるが，進展範囲や浸潤様式に見合った切除術を行う必要がある．